

【エッセイ】「別に私はね、あんたと縁を切ってもいいのだよ。」

母に向かって、電話越しにそう怒鳴る祖母。私の母と祖母は仲が悪い。でも、そこまで言われてもなぜ母は祖母を軽蔑したり、見捨てたりしないのだろう。そして、なぜ母は福祉の仕事続けるのだろう。

「年配の方が素敵な老後を送れるように、サポートしたいの。私の手で、その人の居場所を作ってあげたい。」

母は、遠くにある、綺麗なオレンジ色の夕焼けを見つめながらそう言った。

私の母は、公民館で働いている。福祉の仕事ではないが、公民館に訪れるお客様は年配の方が多いため、福祉の仕事に近くなる。母は仕事から帰ると、今日あった理不尽な出来事を語る。

ルールが守れないことに対し、何度注意しても、全く聞く耳を持たずとしないおばあさん。愚にもつかないことで怒鳴り、喚き散らす迷惑なおじいさん。私の周りには優しくて穏やかなおばあさんやおじいさんの影は、母の言葉からは少しも見受けられない。それでも、母はこの仕事を辞めない。

「皆、私の両親に見えるのよ。」

年配というだけで、社会から疎外されるような存在になってしまうおじいさんやおばあさん。その人たちが、憩いの場を求めてやってくる公民館。そこを、気持ちよく使える場所にしなければならないのだ。暴言を吐かれたり、辛くなったりすることもたくさんある。それでも、そのような人たちが笑顔を見せてくれたとき、心を休ませている姿を見たとき、母は温かい気持ちになる。あのとき母が見ていた、夕焼けのように。たとえ仲の悪い祖母がいても、それはたった一人の母のお母さん。何を言っても、結局自分の味方でいてくれるのは、お母さん。そういうことだと思う。

母は、立派だ。芯が強く、何を言われてもめげないその姿は、眩しかった。福祉の仕事は、素敵な仕事だと思う。重労働だけではなく、お客さんに元気を貰えるから。その人の美しい人生を、この目で見られるから。今何を言われていても、その裏には楽しさが、喜びが、幸せが隠れている。一度きりの自分の人生、私も自分の手で充実させていきたい。そう思い、窓の外に目をやると、母が見ていた、綺麗な夕焼けがあった。